

○議長（長澤健君）

続いて通告8番 1番 秋山仁君の一般質問を行います。

1番 秋山仁君。

○1番議員（秋山仁君）

それでは、通告に従いまして質問させていただきます。今日最後のようにすけれど、通告が遅くなってしまったので、1問真剣に質問させていただきます。

学校給食の食材の地産地消について伺います。学校給食センターは、本年8月24日から稼働していますが、建設に至っては、それぞれの給食室が老朽化し、また衛生基準、ドライ方式や品物の区分訳がなくそぐわないものでした。ほかにも異物混入の発生が何回かありましたが、そのような経緯の中で約11億円建設費をかけ完成しました。稼働後はセンター方式により、1日生徒、教職員合わせ1300食調理し、調理時間も7時半から10時半の短時間で調理の方々の手際の良さにより、美味しい給食を食べていると聞いております。

そこで（1）番ですけれど、食材を地産地消の観点から、今は主にJAから調達していますが、安定的な購入をさらに進めるために、何らかの方策を考えるべきと思いますが、伺います。

○議長（長澤健君）

教育総務長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問につきましてお答えさせていただきます。近隣地域から農作物を調達することは、新鮮で安全な野菜を手に入れることができ、たいへん有効な調達方法と考えております。そのため、給食センターでは地元農産物の安定的な購入ができるよう、JA山梨みらい営農販売部増穂センターに対し、献立月のおよそ2か月前に、センターから提供できる野菜の種類と量の問い合わせを行っております。その後、食材の種類、発注量について限られた給食費を基に献立を調整し、献立月の15日前には1か月分の一斉発注を行っております。

今後は、JAふじかわ増穂センターが開催していた「生産者との情報交換会」の再開をお願いし、町内農家の方々へ、給食センターの食材発注の状況を周知していただき、さらに地元農産物が安定的に購入できるよう対応して参りたいと考えております。以上になります。

○議長（長澤健君）

秋山仁君。

○1番議員（秋山仁君）

前も同じように答えていただきました。再質問ですが、野菜に関しては農家の高齢化などが進みまして、納入が困難だったりしておりますけれども、納入基準がどうしても厳しいということも聞いております。

そこで、主にJAとの関係の中で納入をしているわけですが、情報交換等を綿密に行っているのですか。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。農家との直接の情報交換というのは先ほどの答弁にあったとおり、JAのほうで間に入っていたきながら行っておりましたが、昨年度は行われておりませんでした。今の状況では、栄養教諭が農協のほうに連絡をとりながら、地元の農産物2か月後に何が入ってくるのかというふうな情報をいただきながら、発注計画のほうを考えております。以上になります。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

そうしますと栄養教諭が、JAとの話し合いというのか情報交換によってやっているのかなというふうに理解しましたが、やはり当局でもその辺は把握するといいますか、情報交換が大事ななと思われますけども。

再質問ですけれども、全国各地でよくあの地産地消といいますけれども、当局では、地産地消というのはどういうふうに理解しているのでしょうか。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。給食の食材、特に農産物についてですが、地元の野菜ということで、町内で採れる野菜、また峡南地域で採れる野菜。あとは県内で採れる野菜という形で考えております。実際の献立を作っている中で、できるだけ県内産のものが入るように、それぞれの業者等にはお願いしておりますが、時期など比べるとどうしても県内では無理ということであれば、日本国内のという形で食材のほうを発注して給食には使われております。以上になります。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

地産地消を端的に言うと、「県内で生産したものを地元で消費する」これが地産地消かなということですよ。この言葉が昭和56年ですか、農林水産省の地域内食生活向上対策事業のときから徐々に文言というのですか、語句が使われたということをお聞きしておりますけれども、ここで再質問します。

そうしますと、地産地消の位置づけというのは、どのように考えているかお伺いしたいです。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。地産地消の位置づけということですが、現在給食センターのほうでいろいろな食材を使っております。なるべく地元の野菜をとということで、地元で採れる食材、タマネギやジャガイモ、こういった食材はかなり給食の献立のメニューでたくさん使われていますので、こういったものを地元の野菜という位置づけの中から、できるだけ購入していきたいと考えております。以上です。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

そういうことも言えるかなと思われるのですが、やはり地域で生産されたものを地域で消費することだけではなくてですね、消費しようとする活動を通じて農業者と消費者を結びつける取組みだというふうに思います。そして、消費者が生産者と顔が見える、話ができるというような関係の中で、地域で購入し、それがひいては地域活性化になるのではないかとということが位置づけではないでしょうかと私は思います。

次に再質問させていただきます。先日、産業振興課で資料をいただきまして、個人農家の農業センサスの結果を見ますと184軒でした。主だった農家と準農家で合計36軒。ほかの方たちは副業であったのですが、先ほど回答も出ましたが、この人たちの一部でも当局から農協を通じてでもいいと思いますけれども、農産物の納入などの働きかけはできないでしょうか。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。先ほどの答弁でも言いましたとおり、JA富士川増穂センターで開催してきました生産者との情報交換会を、JAのほうに働きかけております。昨年度は開かれてはおりませんでした。こういった情報交換会といった中で、給食センターがどういう食材について納入、いわゆる発注方法を行っているか。具体的には2か月前に、給食の献立をつくりますので、その時点で2か月後にどんな食材が採れるのかといった情報を、農協を通じながら地元の農家のほうからいただければ、給食の献立の中にその地元の野菜を使っていくといった組立てができると思われまして。そういったことで、この生産者との情報交換会は町としましても重要だと考えておりますので、引き続き農協に働きかけながら、地元の農産物が安定的に購入できるように対応して参りたいと考え

ております。以上です。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1 番議員（秋山仁君）

ちょっと回答を聞いていますと、J Aのほうにともかく情報交換会とかそういうものもやってくださいよということですがけれども、町ではそれを農協に指示ではないのですけれども、そのように伝わっているのかなと。もっと町にも積極的に動くというか、そういうことも大事なのではないのでしょうか。もう1度お願いします。

○議長（長澤健君）

教育長 野中正人君。

○教育長（野中正人君）

地産地消による給食センターの食材を、地元の農家からどのように調達をしていくかというような部分でございまして、先ほど課長が答弁したとおりですが、これまでもJ Aのほうで生産者との情報交換というのを、今も言ったとおり去年はちょっとできていないんですけれども、開催をいたしまして、そこに町の担当者、それから栄養職員も出向いて、そしてその調整の中でいつ頃までにどうすれば、どういうようにできますよというようなこともやってきたところでございます。

給食センターになりましたので、調達方法も変わってきますし、量も変わってきます。ですから、こういった情報交換会を、やはりもっと綿密にやっていかなければいけないというのは、センターのほうでも承知をしておりますから、そういう意味でJ Aのほうへ、そういった相談というか働きかけをやっていくということはしていきたいと思っておりますけれども、センターのほうから直接生産者の皆さんにお声がけをして、どうこうということまではちょっとできませんので、そこにはやはりJ Aに入っていたきたいと思っております。センターのほうでも、そういった働きかけは今後やっていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。以上です。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1 番議員（秋山仁君）

そうしますと、去年までは情報交換をしたけれども、今年は全然していないということだと思うのですね。8月24日から新しくセンターが稼働したのであれば、その前にもっと頻繁に会議と言いますか、このような時だからどうかというようなこともありますけれども、去年の話は去年の話でいいのですけれども、今年も全然やっていないですね。その辺はどのようにお考えになっているのです

か。

○議長（長澤健君）

教育長 野中正人君。

○教育長（野中正人君）

給食センターのほうとしては、J Aのほうには情報をくださいというようなことで、連絡はしている訳でございますけれども、最終的に情報交換をやるかやらないかという部分は、どうしてもJ Aさんのほうが主催になりますので、去年の部分にしても、今年についても、情報交換会は開かれていないということになります。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

J Aがしないということですか。端的に言うんですけど、やはりその辺はもっと町当局でも動くほうがいいかなと思います。

再質問ですけども、学校給食に地産地消の食材を多く取り入れるという、この効果はどのようにお考えですか。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。地元の農産物を献立に取り入れるといった形で、食育この考え方に尽きると思います。栄養職員、栄養教諭のほうでは、給食を調理した後、センターから給食が運ばれた後に各学校に出向いて献立の内容を、児童生徒に対して、食育という教育を通しながらお知らせをしているところです。こういった中で地元の野菜を使ってあれば、これは本当に富士川町のどここの畑で採れた、誰々さんが作ったというような形で、本当に地元で作られた農産物という紹介の中から、そういった周知を今後もやっていきたいと考えております。以上になります。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

私の考える地産地消の効果ですね。やはり子どもたちの健康づくり、先ほど課長も言いましたけれども、食育、郷土愛の醸成ですね。そして情操教育に大きくつながるかなというふうに思われます。

再質問ですけども、学校給食を町民で食べてみたいという方が、たまに聞くのですよね。まず地産地消の観点から、町内レストランや食堂などで提供することの検討といいますか、そういう考えはありますか。

○議長（長澤健君）

秋山議員、今回は安定的な購入を進めるための方策であって。

○1番議員（秋山仁君）

それでは、ちょっと変えます。もし答えできるのであれば、今手を挙げましたよね。

○議長（長澤健君）

質問がずれているので、それはなしにしてください。

○1番議員（秋山仁君）

私はそういうふうに思っていなかったですけども。

再質問にいきますけれども。今後の納入体制としてですね、今はJ Aが中心になっていますが、学校側、当局、生産者側とで新たな組織を作るようなお考えはあるかどうか、お聞きしたいです。

○議長（長澤健君）

新たな組織を作る。それは、どういう組織のことですか。ちょっと確認できなかったですけど。

○1番議員（秋山仁君）

納入体制の新たな組織です。

○議長（長澤健君）

納入するための新たな組織ですね。

○1番議員（秋山仁君）

そういうことです。

○議長（長澤健君）

教育長 野中正人君。

○教育長（野中正人君）

現時点で新たな組織ということまでは考えていないですけども、先ほどからのお話で、J Aさんがとにかく中に入ってくれていただけますので、そこの連携をとにかく強化するというので、前へ進めるような形へはしていきたいなと思っております。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

連携綿密な会議ですか。先ほどからそう言っていますけれども、今年度にあっては1回もやっていないというのは私はどうかと思います。ぜひ頻繁にやってください。

次に（2）番としまして、質問させていただきます。町内の不揃いな品物を可能な限り現場、これは給食センターですね、加工調理していると聞いていますが、

町内農家が、さらに納入できるよう今後周知すべきとも考えますが、伺います。ちなみに、例えば学校給食センターにジャガイモを現場とすれば10センチぐらいのものが必要だけど、現場の調理の方は7センチでも12、3センチでも許容範囲みたいな感じで、結構臨機応変にやっけていただいていると聞いているのですよね。それも踏まえて、お願いします。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。町内農家の地産野菜は多少の不揃いでも、食育の観点から調理員が手間を掛け調理することで、地産野菜の特色ある献立として使用することができます。これらの野菜は、給食を提供する2か月前の献立作成時に、収穫情報があれば献立内容に入れることができます。

しかし、学校給食衛生管理基準に基づいた調理方法や給食配送時間を確保するため、調理時間に制限があることなどから、今以上に不揃いの野菜では、下処理から調理に時間がかかり、配送時間を考えると購入できないことがあります。

こうしたことから、町内農家が品質の良い地元農産物の生産や納入ができるよう、JAみらい営農販売部の増穂センターと相談し、連携していきたいと考えております。以上になります。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

連携という言葉が出ましたけれども、スムーズにいくようにお願いします。

再質問ですけれども、先日、給食センターへ行きましたら、栄養士の方が言うのに、今特に必要な食材を聞いてみたら、9種類、長ネギ、ジャガイモ、そしてタマネギ、ニンジン、ダイコン、サトイモ、サツマイモかな。季節によっては、モロコシとブドウですか。これが特に必要であると。この品物でいきますと、この地域でも結構作れるのかなというふうに、簡単ではないかもしれないですけども、それなりのものを出さなくてはと思われまますけれども、そういったものが、当局でも農協さんにも周知といいますか、そういうことを必要があるかなというふうに考えて、農家さんがこの9種類のものを作ってみるかみたいな方も中には若い人ではいるのですよね。その辺の周知をもっとすべきでないかなと思われまますけれども。先ほど、JAさんをお願いといいますか、そういうことでやっているのですと言いましたけども。ちょっとその辺どうでしょう。

○議長（長澤健君）

教育総務課長 中込浩司君。

○教育総務課長（中込浩司君）

ただいまの質問にお答えいたします。議員さんが今述べました8種類、9種類の農産物ですけど、これがセンターの始まる前、各学校の自校方式からもある程度入れております。こういった情報もJAのほうでは了解していますので、引き続き1年間を通して、今言った種類の野菜、大まかになりますが、冬の時期、こういったダイコン、長ネギ等はたくさん使う、他の食材につきましても季節的なものもありますので、こういった情報をJAのほうに流していきながら、そこから各地元の農家さんのほうへ周知していただき、連携して地元農産物の購入を進めていきたいと考えております。以上です。

○議長（長澤健君）

秋山 仁君。

○1番議員（秋山仁君）

ぜひその辺で進めてみてください。

再質問ですけれども、耕作放棄地解消のためには、適地適作の考えの中で普及センターやJAですね、ここでセミナーなんかを開いて、そして、農産物の推進を行い給食センターに納入をどうかと思いますいかがですか。

○議長（長澤健君）

秋山議員。今のもちよっと通告から逸れているんですけど。

○1番議員（秋山仁君）

先進的に地産地消に進んでいる事例を見てみますと、なぜ地場の食材の活用を進めるかということの中で、やはり生産流通が調理などに携わる人が、意義目的がしっかり理解できているというふうに思われます。全ては、地域の子どものためという、共有の目標を持っているということだと思います。ぜひ、そのようなことで、共有目標の中で、生産者は地場産業の普及、利活用。子どもたちの健康安心安全を提供する。また学校側は、子どもたちの食育、健康教育、子どもたちが住んでいる地域の特産を知り、伝統文化を味わう。こういったことが大事なかなと思います。ひいては地域への愛着がつながることとっております。行政側にしてみれば、地場産業の活性化ですね、耕作放棄地解消ということが言えるかと思われます。学校時代、よく給食時間が1番楽しかったという、私は思い出がありますけれども、そういうふうに、やっぱり子どもたちもそう思うように、ぜひ考えたいと思います。

質問はこれでないのですけれど、これで終わりたいと思います。以上です。

○議長（長澤健君）

以上で通告8番 1番 秋山仁君の一般質問を終わります。